JLC日本語スタンダーズの開発

伊東祐郎（東京外国語大学留学生日本語教育センター教授）

東京外国語大学留学生日本語教育センター（JLC）では、大学における日本語教育の指針となる「日本語スタンダーズ」の作成に向けて研究を重ね、2006年には「JLC日本語スタンターズ」の最初の版、2009年には改訂版を作成した。

完成に至るまでの多くの苦労話を含めて、以下の三点について説明が行われた。

1．JLC日本語スタンターズ作成の経緯

2．JLC日本語スタンターズの特徴

3．JLC日本語スタンターズ作成の意義、役割と機能

JLC日本語スタンターズの特徴は、「アカデミック・ジャパニーズ」を「大学等の勉学に必要な日本語」と捉えて、その基準を「JLC日本語スタンターズ」と規定したことにある。留学生が大学での勉学の際に欠かせない日本語習得のための「聞く」「話す」「読む」「書く」に「話す・聞く」を加えた5技能を、初級から上級を5段階に分けて、各技能、各段階での行動目標を優先的に示し、さらに各技能で到達すべき「ゴール」を設定しそれに向けて各段階でどのような教育が行われるべきかをも示したものとなっている。

また、参加者が「英語力自己診断票」を各自行い、その結果を利用して、日本語力の記述の仕方について検討をした。さらに「JLC日本語スタンダーズが目指しているのは内部の個別機関での運用か、他機関も含めた汎用的なスタンダードか」「技能別スタンダードの基準と実際の運用の関係はどうなっているか」等の質疑応答も活発に行われた。

（文責　酒井）

Situational Functional Japanese*が挑戦していること

小林典子（元筑波大学留学生センター教授・現同センター共同研究員）

本留学生センターの主教材であるSFJを作成して20年の年月が経った。かつては、留学生センターの教師のほとんどが作成者であったが、今ではそうではないため、この本について説明することとなった。開発の経緯、達成目標、構成、補助教材、特徴について述べることで、「本物の日本語」「偽物ではない日本語」を示すというSFJのユニークなコンセプトを伝えたつもりである。

SFJの使用対象は大学および大学院の研究留学生で、大学生活に必要なコミュニケーション能力を育てることが目標となっている。また、日本語コースを終了後も、自律的に日本語力を伸ばしていけるような基礎力を養成することも目指している。特徴をまとめると以下のようになる。

● 複雑さの中で学習する。(実際の表現を隠さない。単純化しない。)
● 自然な日本語のモデル会話がまず先行して作成されている。
● 会話における社会的人間関係を重視している。
● モデル会話には第一課から敬体と常体が同時に提示される。
● 学習者のニーズ調査に基づく場面、機能シラバスである。
● コミュニケーション能力重視でありながら、文法構造練習もある。
● 文法はスパイラルに重要項目が複数回取り上げられる。
● 多様なタスク型の練習を通して4技能の練習と日本文化を学べる。
● 自習用の文法、会話(言語文化情報も含む)の解説が詳しい。
＊筑波ランゲージグループ(大坪一夫ほか筑波大学留学生センター24名) 凡人社　1991-1992

中国人日本語学習者の発音矯正トレーニングについての実践報告

許挺傑*　　酒井たか子**
(*筑波大学大学院人文社会科学研究科院生、**筑波大学留学生センター教授)

本発表では、2010年2月から4月にかけて行った中国語を母語とする初級日本語学習者対象の発音矯正トレーニングの理念と実践について報告した。

発音を苦手とする中国人初級日本語学習者に対して、日本語音韻知識についての指導、発音矯正および自律的な発音練習をねらいとした発音矯正トレーニングが有効であると考え11回の実践を行った。トレーニング前とトレーニング後の学習者の発音において、アクセントの習得などに大きな質的な変化が認められた。また、トレーニング終了後に提出された学習者の感想レポートには、学習者の発音・アクセント習得に対する意欲が高まったことと、今後もトレーニングで実践したことを継続的に練習していく強い意志が述べられており、学習者の自律的な学習につながることが期待できることが分かった。

Ｊ－ＣＡＴの紹介

今井新悟(筑波大学留学生センター教授)

J-CAT(Japanese-Computerized Adaptive Testの略)は、非母語話者の日本語能力をコンピュータを使って自動で判定するアダプティブなテストである。アダプティブ(適応型)テストとは、受験者の能力に合った問題を自動的に判定して順次出題するテストであり、ちょうど、視力検査のイメージである。視力検査ではいくつかの環を指し示して、ギリギリ見

えるところが視力と判定される。アダプティブテストも同じ原理で受験者の能力を判定する。

J-CATはインターネットに接続して受験できるため、インターネットにつながってさえいれば、時間・場所の制約を全く受けずに、いつでも、世界中のどこからでも受験できる。また、文字は画像に変換して配信するので、文字化けの心配もない。たとえ、使っているコンピュータに日本語のフォントが入っていなくても受験できる。試験時間はアダプティブテストであることから、受験者によって長短があり、おおよそ、40分程度から80分程度となる。試験終了直後に成績が画面上に示されるとともに、スコアシートをPDF形式で保存・印刷できる。

個人受験と団体受験の方法がある。個人受験は、J-CATのWEBページで登録後、72時間以内にパスワードが発行される。団体受験では、受験者全員の成績のとりまとめサービスなどがあり、国内外の日本語教育機関でプレースメントテストとして採用されている。より詳しい情報は、以下のURLをご覧いただきたい。URL: http://www. j-cat. org

「日本語トレーニング」について
―初級学習者の日本語運用能力を高める授業実践―

杉浦千里（筑波大学留学生センター非常勤講師）

本学予備教育コース初級レベルで2007～2010年度に実践した「日本語トレーニング」は、基本的な文法や語彙等の知識はあっても、それを有機的に結びつけて自己表現することに困難を感じている初級の学習者を対象として開発したものである。改善策として、①既習の学習項目を統合する活動、②あるまとまった「意味のある」発話の塊の習得、③日本語と自分自身の感情や経験を結びつける習慣づけの３点が重要だと筆者は考える。

本活動の流れは次の通りである。既習の語彙や表現で作成された３～10文のストーリーを教師が読み聞かせる。学習者はそれを聞き、再生する。４～５つのストーリーを再生した後、内容を読んで確認する。次に、学習者自らの体験や感情を話す。クラスメイトとQAを行って内容を深め、最後に各自のストーリーを作文し、添削指導を受ける。これらの活動を継続することで、学習者はごく限られた日本語の知識でも、それらを駆使して自己表現することが徐々に可能になり、同時に日本語で自己表現しようとする意識が高くなるようだ。

この実践を通じて明らかになったことは、①「何を教えるか」だけでなく「どう使わせるか」への教師側の配慮と工夫の重要性、②初級のごく早い段階での「一人語り」指導の必要性、③話す/読む前に聞いてわかる「聴解優先」の有効性、④日本語らしさを犠牲にしてでも自己表現を促すことの是非の４点である。今後も実践を通じて検証していきたい。

大学におけるアカデミック・ライティングの試み
－ピア・ラーニングとプロセス・アプローチに注目して－

大島弥生（東京海洋大学海洋科学部准教授）

近年、留学生や大学初年次生などに向けたレポート作成の指導授業において、文章を書く過程での学習者間の相互行為を重視した手法、すなわちプロセス・アプローチによるアカデミック・ライティングの指導が広まっている。その中で、学習者同士による協働推敲（ピア・レスポンス）、「作文のプロセスの中で学習者同士のグループが、お互いの作文について『書き手』と『読み手』の立場を交替しながら作文を検討しあう活動」が注目を集めている。

本報告では、まず、この手法の背景にある考え方や、初年次のレポート指導科目での実践事例を紹介した。対等な対話のプロセスでの互恵性を重視する協働学習においては、活動目的の明示と意義の理解、緩やかな導入、グループ編成の工夫などが留意すべき点となる。次に、参加者自らが書いたレポートのアウトラインを用いて協働推敲を体験していただいた。協働推敲の中では、書き手による説明と聞き手からの質問やコメントのみならず、聞き手による書き手のアウトラインの口頭での再生が重要なポイントである。活発な活動を経たのち、参加者からは教師介入の判断などについて質問が出された。

「留学生のためのアカデミック・ライティング教育の課題」

二通信子（東京大学日本語教育センター教授）

日本語のライティングのクラスでは、学生のレポート・論文の作成に対してどのような支援ができるのか、以下の三つのセクションに分けて検討した。

最初のセクションでは、学部留学生の立場から見たレポートの難しさについて述べ、レポートについてのスキーマや、参考文献や外部から得た資料に対する批判的な読みの重要性を指摘した。また日本語のクラスでの作文とレポート課題の違いについて、参加者どうしの話し合いを行った。次のセクションでは、レポートの作成につながるライティングの指導内容について検討した。レポートのタイプによる構造の違い、論理的な思考の方法、論理の組み立て方と文章での表し方、資料や文献の利用などについて、発表者が作成した教材などを例に挙げながら説明した。最後のセクションでは、大学院の研究留学生を対象にした、論文における引用に関する指導について報告した。論文で適切な引用を行うためには、資料や文献に対する批判的な読みの能力とともに、必要な部分を要約したり言い換えたりしながら自分の文章に組み込んでいくためのライティングのスキルが必要である。

引用に着目した作文課題の結果から、こうしたスキルが不十分なために不適切な引用となっている例を示した。

今後の課題として、「レポート・論文のタイプや構造の可視化と、レポート作成の指導過程を通して、レポート・論文についてのスキーマを養成すること」「引用のスキルを学ぶための教材を開発すること」「資料や文献を使ったライティングを積極的に取り入れて、レポート作成の土台作りをすること」の3点を挙げた。

2010年度日本語予備教育夏学期コース報告

石上綾子　柳田しのぶ　宮崎恵子　平形裕紀子
（筑波大学留学生センター非常勤講師）

今後も増加し、多様化するであろう筑波大学留学生センターの留学生の日本語学習ニーズに対応できるよう、日本語コースの在り方の検討や授業内容の見直しが行われている。2010年度の夏学期コースは、今までの本コースの見直しのため新しい試みを取り入れた。

一つ目は予備教育生だけでなく広く受講生を募集した。二つ目は技能別のクラスを行わず、SFJのクラスだけを行った。三つ目は「漢字タイム」を設け、SFJのクラスの中で、毎日15分程の時間を設定して漢字の授業を行った。

夏学期コース終了後、学生にアンケートを行った。これらの実践とアンケート結果から、来年度以降に向けた夏学期コースのあり方についてまとめた。

1．日本語を学ぶ動機の高い学生が集められるということから、受講生を広く募集する。
2．学生から高い評価を得られた「漢字タイム」を取り入れ、学生が漢字学習に前向きに取り組めるようにする。
3．学生からは会話に対するニーズの高さがうかがえた。今後はスケジュールの中にコミュニカティブな活動を増やしていく。

教室授業との併用におけるeラーニングの効果的な利用

藤村知子（東京外国語大学留学生日本語教育センター准教授）

東京外国語大学で開発中の日本語eラーニング“JPLANG”のコンテンツ及び日本語のレベルに応じた授業への組み込みについて紹介した。JPLANGの特徴は、直接法で行われる教室授業で使用する教材をeラーニング化したもので、文法、ドリル、聴解、読解などのコンテンツの揃ったWeb版総合教科書を無料で公開しているほか、インターネットに接

続されたパソコンが１台あれば、かつてのLL教室で提供されていた機能が実現できることである。

eラーニングの長所としては、教室授業と異なり、学習者の好きなペースで何度でも繰り返して例文や聴解教材の再生・練習が可能であることが挙げられる。一方、短所としては、メンター・チューター・コーチがいない、いわば「野放し」状態では、学習能力の高い学習者はますます日本語力を伸ばす一方で、eラーニングを使って他の学習者に追いついてほしい学習者は全く使わないといった問題があり、それを解決する必要がある。

日本語レベルによってもeラーニングの利用方法は異なる。content basedの比重が高くなる中級レベル以降では、JPLANGに産出系のタスクも組み入れ、上級レベルでは、日本語学習者と母語話者が共通のテキストに基づいてディスカッションへと発展させられる教材を組み込む予定である。